様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２６８２００７

研究課題名（和文）古墳出土遺物の資料化と報告に関する実践的研究

研究課題名（英文）Practical Study on Taking Data and Reporting of Relics Excavated from Ancient Tombs

研究代表者
阪口　英毅（Sakaguchi, Hideki）

京都大学・文学研究科・助教

研究者番号：５０３１４１６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　6,400,000円、（間接経費）　1,920,000円

研究成果の概要（和文）：　保存処理が実施されておらず、かつ実測図や写真などの二次資料が充分に整備されていない古墳出土遺物を対象に、最新の研究で必要とされる水準を満たした資料化の作業を実施した。具体的には、大阪府七観古墳から1947年・1952年に出土した遺物の資料化を完了し、自然科学的分析や考察も加えて研究成果報告書を刊行した。その過程では、遺物の特性に応じた適切な報告方法の検討や原稿のデジタル化などを実践した。

研究成果の概要（英文）：We took basic data (such as drawings and photographs) of relics excavated from Shichi-kan tomb in Osaka Prefecture in 1947 and 1952. These relics have not been treated for conservation yet, and had not been taken enough basic data to fulfill the level required for the latest research.
We completed taking basic data, and we carryed out scientific analysis and consideration about these relics. To open these results to the public, we published the research report. In that process, we practiced examination of the reporting method suitable to the characteristic of relics, and digitization of the manuscript.

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：遺物　再検討　基礎資料整備　二次資料化　報告書　デジタル化　七観古墳　古墳時代

１．研究開始当初の背景

古墳時代を考古学的に研究する上で、古墳出土の副葬品や埴輪などの遺物が果たす役割はきわめて大きい。古墳の編年研究はもちろん、それを時間軸とした首長墓系譜の研究や地域間交流の研究など、あらゆる研究テーマにおいて、古墳出土遺物はその基礎をなす一次資料として位置づけられる。

そのため、古墳時代研究が安定的に推進されていくためには、一次資料である古墳出土遺物そのものが、資料として活用できる状態で恒久的に保管され続けていくことがもっとも重要である。

土器や埴輪などの土製品、腕輪形石製品や玉などの石製品については、ほとんどの場合、特別な処置を施さずとも通常の環境下で安定的な保管が可能である。一方、鏡や刀剣などの金属製品、木棺や革製漆塗盾などの有機質製品については、出土後の環境変化による劣化を防ぐために保存処理が必要なほか、保存処理の後も温湿度管理のゆきとどいた環境下で保管されることが望ましい。

しかしながら、そのような体制が一般的となる以前におこなわれた発掘調査による古墳出土遺物の場合、保存処理が実施されていないことが多い。また、各所蔵機関の努力にもかかわらず、そうした遺物の保存処理のための十分な予算を新規に確保することは困難な状況にある。その結果、とくに銹化しやすい鉄製品などは、たとえ将来的に保存処理の予算が確保されたとしても、復元が不可能なほどに崩壊が進行してしまっていることも、現実的な問題として少なくない。

このように、一次資料そのものの保存のための措置を講じることが困難な場合、次善の方策として、実測図や写真などの二次資料を高い水準で作成しておくことが考えられる。日々劣化が進行している遺物に対して、その精細な資料化は、まさに緊急に必要な作業といえる。また、それのみではなく、調査年次のさかのぼる遺物については、現在の研究水準からすれば不十分な資料化にとどまっている場合も少なくないため、あらためて資料化を進めることそのものが学術的にも大きな意義をもつ。

こうした状況の中、近年では、過去の調査による古墳出土遺物の整理報告、過去に報告された古墳出土遺物の再報告などの取り組みがさかんにおこなわれるようになってきた。報告書として結実したものに、福岡県稲童古墳群（山中英彦（編）2005『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第 32 集，行橋市教育委員会）、福岡県月岡古墳（児玉真一（編）2005『若宮古墳群Ⅲ』吉井町文化財調査報告書第 19 集，吉井町教育委員会）などがある。これらは学史的にも著名な古墳であり、また出土遺物が特色ある重要資料ということもあって、その刊行による情報の共有化にはきわめて大きな意義があると評価できる。研究代表者も、大阪府紫金山古墳（上原真人ほか 2005『紫金山古墳の研究』平成 14～16 年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ）（２））研究成果報告書，京都大学大学院文学研究科）、兵庫県小野王塚古墳（阪口英毅（編）2006『小野王塚古墳 出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告第 27 集，小野市教育委員会）の遺物報告に携わり、その成果への反響の大きさに、あらためて二次資料の作成および公表の重要性を強く認識した。

そうした認識のもとに、平成 19～21 年度科学研究費補助金（若手研究（Ｂ））の交付を受け「古墳出土遺物の基礎資料整備に関する実践的研究」を実施し、大阪府七観古墳・滋賀県大塚越古墳・京都府聖塚古墳の出土遺物の資料化に努めたが、想定を超える遺物の劣化状況などの影響を受け、計画の７割程度を達成するにとどまった。また、計画の最終目的と位置づけていた成果の公表は、京都府聖塚古墳出土遺物について実施したものの、七観古墳出土遺物と大塚越古墳出土遺物については実施できなかった。

２．研究の目的

保存処理が施されておらず、かつ十分な二次資料が整備されていない古墳出土遺物を対象として、最新の研究で求められる水準を満たした実測図作成や写真撮影を実施することにより、古墳時代研究の基礎資料整備に寄与することを、第一の目的とした。

その成果を広く共有するために、研究成果報告書の刊行を計画したが、その作成にあたり、将来的に同種の遺物が報告される際に規範となるような、適切な方法による二次資料化や報告の方法を意識的に模索・実践することを、第二の目的とした。

３．研究の方法

平成 21 年度までの遺物資料化の蓄積を踏まえ、後述するように、これまでと同様の方法で資料化作業を継続した。一例として、帯金具について作成した実測図の一部を提示する（図１）。さらに、これまでの過程で明らかとなってきた有機質製遺物の実態をさらに詳細に探るために、文化財科学の研究者に材質同定と構造調査を中心とした自然科学的分析を依頼した。

引き続き、七観古墳および大塚越古墳の出土遺物を取り上げたが、前者を主要な対象とした。これらには、埴輪などの土製品、玉などの石製品、三環鈴などの青銅製品、甲冑・馬具・刀剣・鏃などの鉄製品、帯金具などの金銅製品、矢柄・帯布などの有機質製品が含まれる。それぞれについて最先端の研究を牽引している研究者の助言や助力を求め、可能な限り精確な資料化に努めた。

その際、報告書作成を念頭に置きつつ、遺物の特性に応じた適切な資料化方法の吟味を意識的に進めた。また、類例の検索・資料調査を踏まえた比較検討や自然科学的分析の成果を加味して、矢柄・馬具・甲冑・柄付手斧・帯金具・滑石製勾玉・円筒埴輪・形象埴輪などの七観古墳出土遺物について、時間的・空間的な位置づけを考察した。

以上の成果を、研究成果報告書の刊行という方法によって公表した。その作成作業に際しては、観察・調査成果を過不足なく伝達するという視点から、遺物の特性に応じた適切な報告の方法を吟味した。入稿形態についても、将来的な二次的活用に備え、より効率的なデジタル化を可能な限り模索した。

４．研究成果

研究成果報告書として『七観古墳の研究―1947 年・1952 年出土遺物の再検討―』を刊行した。22 名の研究者が執筆に携わり、本文 406 頁、図版 71 頁に及ぶ大部な報告書となった。これにより、七観古墳から 1947 年・1952 年に出土した、京都大学総合博物館所蔵遺物のほぼすべてについて再報告を完遂し、第一の目的の一端を達成することができた。一方、大塚越古墳については玉の整理作業を進めるにとどまった。

研究の過程では、1947 年・1952 年の調査当時の墳丘測量図などの記録を再検討したほか、文化財科学の研究者と協業しつつ多くの有機質製遺物について自然科学的分析を実施するなど、さまざまな角度から遺物のもつ情報の抽出や補完を試み、それぞれ成果を得た。さらに、遺物の再報告を進める過程で明らかとなったさまざまな課題について各担当者が考察を進め、七観古墳出土遺物をより深く理解し、より適切に位置づけうるよう努めた。

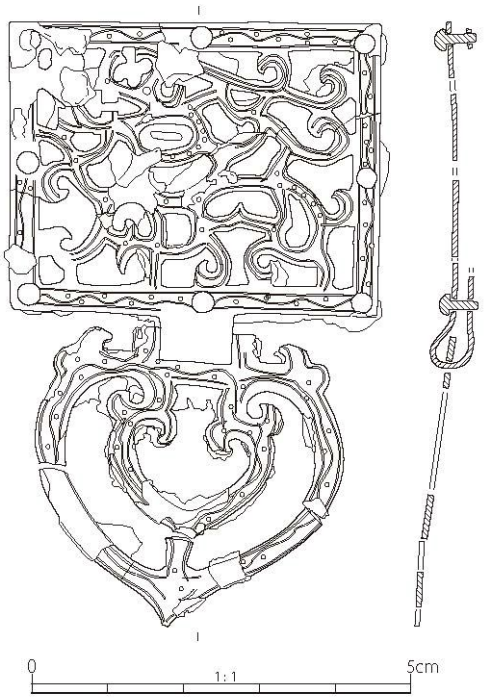

図１　帯金具実測図

その結果、５世紀代の大王の奥津城と目される百舌鳥古墳群にあって、「鋲留技法導入期」の標識古墳であり、かつ武器・武具多量出土古墳であり、かつ上石津ミサンザイ古墳（現・履中天皇百舌鳥耳原南陵）の陪冢でもあるという、七観古墳の諸側面とその歴史的意義があらためて明確になった。

また、第二の目的に沿って、報告書作成の過程で実践した「遺物の特性に応じた報告方法」や「原稿のデジタル化」の内容について、簡単ながらも、研究成果報告書に一節を設けて報告した。

一方で、資料化作業において、ごく一部の遺物についてのみＸ線透過画像を準備するにとどまり、大部分の実測図作成にあたってＸ線透過画像を参照することができなかった。そのため、Ｘ線透過画像を参照しての実測図の補完が将来的な課題として残された。

また、今回の研究によって、保存処理が実施されていない遺物の二次資料を整備し、共有するとの目的は達成できたものの、一次資料そのものの保存処理が実施されることが最善であることはいうまでもない。研究の過程であらためて明らかとなった七観古墳出土遺物の重要性を鑑みても、保存処理の実施とさらなる研究の深化は、今後とも大きな課題であるといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 阪口英毅・下垣仁志・諫早直人・河野正訓・川畑　純・金　宇大・土屋隆史・新宮領奏絵,
「綾部市聖塚古墳出土遺物報告―京都大学総合博物館所蔵資料―」,
『古代学研究』第 197 号, 古代学研究会,
2013 年, pp.37-46, 査読有

② 阪口英毅,
「七観古墳の概要」,
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集（マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究）,
国立歴史民俗博物館,
2012 年, pp.245-259, 査読無

③ 阪口英毅,
「1947 年・1952 年出土遺物の概要」,
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集（マロ塚古墳出土品を中心にした古墳

時代中期武器武具の研究),
国立歴史民俗博物館,
2012 年, pp.293-314, 査読無

〔図書〕（計１件）
① 阪口英毅（編),
『七観古墳の研究―1947 年・1952 年出
土遺物の再検討―』,
京都大学大学院文学研究科,
2014 年

６．研究組織

(1)研究代表者
阪口 英毅
（京都大学大学院文学研究科助教）

研究者番号：50314167